かるむし

45
麻生区文化協会会報

絵と文・菅野　明

細山神明社
―逆さ大門―

村の鎮守の神様は　鳥居をくぐって石段を登っていく…山腹の村を見下ろすような位置に社殿がある…そんなふうに思い込んできましたが、細山神明社の大門は逆に社殿に降りるようになっており「逆さ大門」と呼ばれています。左手に石段がありますが、上って社殿を見下ろすような位置に大門が建てられています。

「名主の夢枕に神様が現れ…西向きにすれば氏子を常に見守ることができる…西向きにすれば遥かに伊勢神宮の方向を向いていることができる…そのためには大門が逆さになってもかまわない…」（境内掲示板より抜粋）そうした由来を知ってからは細山の地には新参者ですが神明社にいっそう親しみがわき、律義に大門まで回って石段を降りて参拝をすることにしています。

拝殿には眼病平癒祈願の「向い目の絵馬」、下の病や腫れ物のため願をかけた「蛤の絵馬」が多く掲げられていて、参拝の度に見入っています。

細山神明社は主神は天照大神で創建は頼朝が幕府を開いた建久三年のころと伝えられていますが、昔から婦人の病には霊験あらたかであったといわれ遠方からの参拝者も多くあったようです。

―菅原敬子新会長に聞く―
わがまち麻生の文化度をさらに高める活動を

菅原会長は川崎市全体を考えるお仕事をしてこられたその広い目で見て、市における麻生区の位置づけをどう捉えておられますか？

菅原：ひとことで表すと、「文化度の高い区」と言えると思います。多摩区と分かれて二十五年足らず。歴史は浅いのですが、新しい区としての勢いと感覚の新しさがあります。一方で、緑豊かな環境と、長い歴史に育まれたよき伝統があります。また、学者・芸術家など広い分野でご活躍の文化人が数多く住んでおられるし、一般の住民の文化に対する関心度が高く、市民活動・文化活動が盛んです。

この文化度の高い街にあって、文化協会の果たすべき役割とは？

菅原：恵まれた文化的風土の中にあるという環境を生かして各部会の充実を図り、会員同士の切磋琢磨により、いっそうの質の向上を目指すべきだと考えています。会員の多くは、各分野における専門家として、深い知識や技能、技量をもっておられます。この専門性を文化協会の各部の諸活動に存分に生かしていただく。それに留まらず分野を超えて互いに刺激し合い高め合ってこそ、協会としての活動の意義が高まると考えます。

日本映画学校・昭和音楽大学・アートセンターなど文化環境が整ってきましたが、そこに当会の活動をどう関連づけていきますか？

菅原：現状は、それぞれの組織が独自に活動していて、文化協会との結びつきはあまりありません。これらの組織ともっと連携を図っていくための強い働きかけが必要です。また、会員ではないけれど、多彩な文化活動を展開している区民の方々がいます。そこに学び、情報を共有し、力を貸していただくことも必要です。そのために、文化協会の門を広く開いておく必要があるでしょう。

区には郷土に詳しい地元の方と、多くの新しい住民の方がいます。ものの考え方に若干のすれ違いがあるように思えるのですが。

菅原：新しい住民はこの地に根ざした伝統的なものごとを知らないために古くからお住まいの方と理解しあえないという面があるかもしれません。最近、ありがたいことに、地元の方が中心となって編集された本『地図で辿る思い出のふるさと』が出版されました。郷土のことを新しい住民に伝えていく活動はすごく大切なのです。このような活動を通じて、両者の融合を図っていかなければなりません。古くから一生懸命やってこられた方のご意見を大切にしなければならないと思っています。人と人とのコミュニケーションが必要なのです。伝統を尊重して活かしてこそ、新しい活動が地域にきちんと根をおろせるのです。

当文化協会の広報活動についてのお考えをお聞かせ願います。

菅原：本誌「からむし」はほかの区にはないユニークで内容の濃いものだと誇りに思っており、引き続き充実させていきたいと思っています。しかし、これはあくまで会員の間の親睦誌です。私は、地域のミニコミ新聞の活用、インターネットのホームページの開設などを通じて、もっと多くの区民に文化協会の活動を知っていただき、会員として活動に参加していただけるように広報を充実させたいと思っています。じっくりと会の実績を高め、確かな広報を通じて会の存在感が高まっていけば、自ずと行政も私たちの声に耳を傾けるはずです。

来年は協会創立二十五周年を迎えますが協会の活動をどのように進めていこうとお考えですか？

菅原：これまで積み重ねてきた恒例の活動を地道に滞りなく進めていきます。「あさお古風七草粥の会」に見られるように、地域に根付いてきた伝統的な行事がいまでは麻生区全体の行事として区民に温かく受け入れられています。このような知恵と活動をもとに、より多くの市民・区民が参加できる麻生区ならではの事業として創立二十五周年に向かってみなさんと一緒に考えていきたいと思います。

（聞き手・文　佐藤勝昭）

～郷土を歩く～「雑学教室」という看板

吉田晴雄

雑学教室の歴史を見ると、藤田元会長の発想でアカデミー部が創設され、その一部に「麻生の里を歩く雑学教室」が計画された趣である。

「何でも見てやろう、何でも聞いてみよう」ということで、その名づけ親は、当時のアカデミー部の副部長前川朋子氏であったと記憶している。

「雑学」の構想は当時の澁谷益左右アカデミー部長の卓見によるところが大きかった由で、郷土・歴史・科学などのほかにレクリエーションを加え、その具体的内容は「いも煮会」「劇団見学」「郷土民謡の会」「禅寺丸柿の試食会」「老人会の踊りや食事」「古戦場の見学」「美術館の見学会」など極めて多岐にわたる内容でした。

「雑学教室」風景（王禅寺）H18.3.27

行動予定地域は、まず郷土である麻生区から、次いでその周辺、さらに足をのばし、散歩・広場・風景を目標としました。

これらの行先・目標は徐々に忘れられていくと思ったので、最近開催される「教室」に於いてその訪問場所・案内要点と案内略図などを添付し、各自が家族・グループで再度行楽の参考としてほしいと考えました。

このような雑学教室の行先も、一度訪れた場所をまた訪れることもありますが、前回見落としたところに気がついたり、環境の変化に気がついたり、新しい発見を見出すこともありました。

徳川時代の行政区画は、相当小規模のもので、現在の町名・大字名に昔の町・村名が残っているものがあります。この頃は現在と異なり閉鎖的な社会で、今の外国旅行以上に厳しいものだったようで、路傍の石のきざみには、その跡が残っているものがあるとのことです。

最近の教室では、目的地に残る話題なども提供することとしております。一例をあげれば、お寺の○○山という呼名もそれなりの由来するものがあったり、お寺の使い方にも、コンサートの企画など新しい考え方がある旨を伺いました。

また、ある神社では戦後まで「白」という色についてははばかりがあり、個人の家や土蔵にも使用しなかったり、正月の餅も神社に供えるもの以外は色のついたものを食するという習慣があったといわれます。

一方、地形についても、英国の丘で狩猟の盛んな丘に似通った丘陵があり、そのためにその地を愛して一生を送られた人もあったとのことです。

こんな昔の話ではなく、現在でも、県営発電事業（水路式・最大八〇〇キロワット）を実施しているところもあって、付近の住宅に送電しており、故障のときには停電まであるとのことです。

柿生名物の禅寺丸柿は甘い小粒のもので、王禅寺境内には原木があり、その隣には北原白秋の歌碑もあります。この碑文は白秋の直筆で、おそらく絶筆ではないかといわれています。

禅寺丸柿は、江戸時代には水菓子ともてはやされ、明治末には名古屋方面まで出荷されましたが、新品種の富有柿・次郎柿が市場に出回るようになると市場性は減り、現在はワインとお菓子に人気が残っています。

私財を投げ打って郷土に尽くした
土方達

千坂隆男

細山神明社の下に四基の記念碑がある。篆額をみると左から

開墾記念碑　（昭和十一年四月）
川崎市合併祈念道路碑
（昭和十七年二月）
改路記念碑　（大正七年八月）
御大典記念改路之碑
（昭和四年三月）

細山神明社の下にある開墾記念碑　その他の記念碑

と、ある。これは細山の山村としての歴史そのものである。

細山は新編武蔵風土記稿（一八二六）に拠れば「村の地形細長くして其の地は全て山上なるを持って起こりし名なりという……今は猶繁衍して五十九軒におよべり」とある。明治二十二年（一八八九）までは細山村として続いてきたが、市町村制の実施に伴い橘樹郡生田村に属した戸数八十余戸の集落である。道路の改修拡張と農地の拡大改修（深田の排水を良くし良田にする）は、山村の発展に欠くことのできない事業であった。細山の村民は全てこれらを自分たちの力で行った。その自信と誇りが四基の石碑である。

そして明治末から大正・昭和にかけて細山の指導者として活躍したのが土方達である。

地域の発展・開発のテンポは速く、四分の三世紀前の人物の足跡をたどることがすでに難しくなっている。私が集めた文献と長老の話から、その人物像を描いてみたい。

「この前の山も土方さんの持ち山だった」

土方達は、細山の草分け四家の流れをくむ地主の家に育ち、大正六年四月生田村議会議員となり、同年七月には生田村長に就任している。なお同年十一月には生田村農会長になっている。村民の支持のもと村長は六年間、農会長は十年間その職を続けている。

「土方さんは経済力と信用のあった人格者でした」

生田村は、現在の金程・高石・百合ヶ丘・向原・細山・多摩美・千代ヶ丘・東百合丘・西生田・栗谷・南生田・長沢・生田・東生田・枡形・東三田・三田・寺尾台を版図とする大きな村である。これらの地域は、多摩川の支流五反田川と平瀬川の流域にあり、鶴見川流域の柿生とは異なった結びつきを持っていた。

始めに、明治時代の農政について触れておく。

明治政府は、明治十四年（一八一八）、農商務省の設置と共に大日本農会を設立し、農産品評会を通して農業技術の改良を促していた。

明治三十三年、神奈川県農会、続いて橘樹郡農会・町村農会と裾野を広げていった。このことは柿生が属する都築郡においても同じであった。

明治三十九年、生田村農会が設立され、

①農業の指導奨励とその施設
②農業従事者の福利増進
③農事に関する研究調査
④行政庁への建議と答申
⑤農事に関する紛議の調停・仲裁

を目的とした。

明治三十九年は農政にとって記録すべき年であった。橘樹郡農会が主催する「信用組合講習」が開かれた年である。農民が自ら信用（貯蓄・貸し付け）と購買（肥料・農機具等の購入）を手がける組合法が施行された。

同年、長沢に生田村生田信用購買組合が成立している。

細山では、明治四十一年、無限責任細山信用購買販売生産組合を立ち上げた。生産から販売まで農家の全てを共同で進めようというのである。組合長として采配をふるい、リーダーとして先頭に立ったのが土方達である。

大正六年、産業組合中央会より成績優良として表彰された。次いで大正八年に、橘樹郡長から表彰と表彰金を受けた。大正十四年には、土方達個人が全国表彰を、同時に組合が神奈川県の表彰を受けた。

このように、細山の農業活動は近隣の模範として注目され、認められた。日本の農村は緩やかな成長を遂げ、細山においても養蚕による現金収入によって、江戸時代から続く俳諧の道はさらに地域の文化活動として広がっていった。

土方　達

しかし、明るく見える農村にも問題があった。

地主と小作の関係である。大正年間には県内でも数ヵ所、小作争議が起こり、生田村内にも小作を支援する労働団体と地主を擁護する官権との争いが起き、仲裁が難航することがあった。このようなとき、土方達は生田村の小作調停委員に就任している。大正十四年（一九二五）のことである。

震災不況（関東大震災一九二三）を乗り越えたかと思ったのも束の間、昭和四年（一九二九）、世界大恐慌の渦に巻き込まれるのである。生糸価の下落、米価の暴落と波及し、冷害が襲った東北地方では子女の身売りまで起こっている。

神奈川県は昭和四年、疲弊した農村の再建に乗り出し、「神奈川県農事特別奨励地設置計画」をたてた。全県で一ヵ所「モデル農村」を指定し、三年間で二千二百円の奨励金と指導技術員をつけるというのである。

細山はその指定を受け、誇りと団結心で乗り越えていこうと「細山振興会」を設立し、会長に土方達が就任する。

活動目標としては、

①農家一戸あたりの平均耕地面積が一町五畝、しかも畑と深田であっては生活は苦しい。そこで、平均耕地面積を一町五反に広げ、水田を多くしようとした。

②牛馬を飼育し、畜力を利用すると共に堆肥作りを奨める。道路・水路の改修を図り作業効率を上げる。山林を開墾し、果樹栽培を増やし、所得の増加と多面化を図る。

③栽培品種を整理し、生産技術の向上を図る。

④農繁期託児所を設置し、主婦の農業労働力の効率を図ると共に、乳幼児の健康・心身の成長を願う。

村民の協力と確実な指導意図のもと、着々と実践を重ね、成果を獲得していく。

昭和六年、村民は県職員から生産組合の行き詰まりを聞かされた。

生産組合員は協議し、貯蓄金の六割削減をもって乗り切ろうとした。土方達は、生産組合長としての責任を感じ、全財産を投げ出して負債の整理をした。

「私は未成年者であったが、村に大変なことが起こったということを聞いている」

この事件は表面に出ることなく収束するが、村民の心に深く傷を残した。モデル農村「細山振興会」は何事もなかったかのように事業を伸展させていった。

昭和七年（一九三二）、大日本農会報は、神奈川県の五つの優良農事組合を列挙する中で、細山を「社会的精神的事業組合」として絶賛した。

国が掲げた農村経済更生運動は「細山振興会」によって実証されたが、その陰に土方達という大きな犠牲があったことを忘れてはならない。

農繁期託児所（香林寺の庭にて）

舞台衣装を着けた「民藝」の女優さんを描くデッサン会

今年二十四回目を迎えるデッサン会が、六月一日（日）麻生市民館大会議室で開催されました。四十八名の参加者がありました。

今回モデルになっていただいたのは、劇団民藝の望月ゆかりさん、庄司まりさん。三月から四月にかけて東京芸術劇場で行われた公演「浅草物語」に出演された方々です。

望月さんは、浅草の場末の女給江村千代役の舞台衣装で、何となく投げやりで、だらしない雰囲気を醸しておられました。一方、庄司さんは、大部屋女優のやさしく控えめな雰囲気でした。お二人とも、登場人物になりきってモデルを演じておられ、さすがと感心させられました。

参加者はリピーターが多く、年ごとに上達しておられるので、私ども美術家協会の画家も、ほとんどアドバイスの必要がないくらいです。

初回からほとんど毎回参加という方もおられます。その一人に、九十四歳というご高齢にもかかわらず、お元気でデッサンに熱中しておられる方がいます。いつまでもお元気で参加していただけることを祈っています。

女優さんをモデルにデッサン会という贅沢なイベントを続けてこられたのは、黒川に稽古場のある劇団民藝のご協力があればこそ。窓口になっていただいている田口さんに心から感謝します。

（絵と文・佐藤勝昭）

平成二十年度　夏休み親子教室

六年目を迎えた夏休み親子教室。今年も、およそ四百人の小学生と保護者を対象に、七月二十九日から八月二十六日までの十日間にわたり十四教室が開講された。一講座を除き全て麻生市民館を会場として開かれ、文化協会の事業として定着してきた。

夏休みを過ごす地域の子どもたちにとって、学校でも家庭でもない体験学習の場でもある。参加した子どもたちも、初めて会った仲間と目を輝かせ、期待に満ちた顔で講師と向き合っていた。

「花でテーブルをかざりましょう」と「和紙で染めよう」の講座を見て

秋の草花を中心に用意された十数種類の草花をアイデアペットボトルの花びんに活ける。花を飾ることは初めてと喜んでいる子、時々草や花を摘んできて飾ったことのある子、特にガマの葉は丸めたり、折り曲げたり、各自が工夫をこらし、個性ある表現が見られ楽しかった。

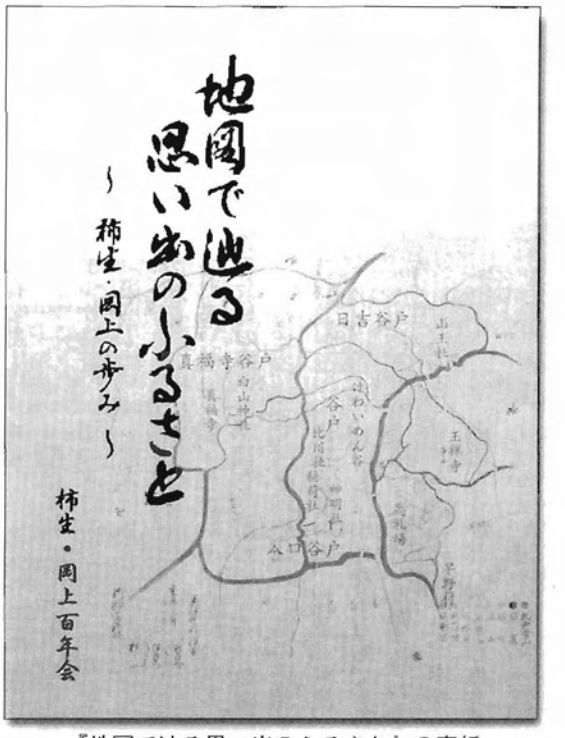
染めものでは、和紙の折り方で予想外のおもしろい作品が染め上がった。できばえに歓声が上がり、参加者は夢中で染めものを楽しんでいた。お手伝いの保護者の方や役員も、思わず夢中に。

今さらながら、おとなの常識では考えられない子どもたちの豊かで自由な表現力に接し、感動している間に時間はあっという間に過ぎた。

こうした子どもたちが、もっともっと多くの分野で目を輝かせ、楽しみ、学習し、成長していくために、文化協会は大きな地域力として発展していくことを期待されているのだと感じた。

（関森田鶴子）

「花でテーブルをかざりましょう」



『地図で辿る思い出のふるさと』の表紙
（編集／柿生・岡上百年会　発行／会長　中島豪一）

『地図で辿る思い出のふるさと』は、中島豪一会長、中山茂編集長のもと、十名の編集委員と地区代表の二十名の作成委員の努力によって二年の歳月をかけ、この四月に出版された。

この原稿は、中島会長、中山編集長、杉本副編集長の話を要約する形で纏めた。

■地図は飽きない（中山）

子どもの頃から地図は好きだった。

「ここは山だ。田んぼがある」「片平のウチの辺りと同じだな」

地図を見ていると、まだ見ぬ土地の様子に想像をめぐらし、時の経つのを忘れてしまった子どもの頃を懐かしく思い出す。

片平、王禅寺の「村絵図」から始まり、各時代の地図。地域が大きく変わり始めようとする昭和三十年代からの十年ごとの地図。そして、先人が作成された「地番反別入地図」を作成委員の方々が土地利用別に色分けしてくださったものを活用した。

そして、この図書の価値を高めたのは編集委員の佐藤英行画伯が昭和初期の地域の姿を「生活文化絵図」として描いてくださったことである。昭和初期の柿生・岡上が鮮やかに目の前に浮かび、懐古の情を深くし私たちの心を和ませる。

■見るから読む、識るへ（杉本）

書店には本が溢れている。なのに活字離れと言われる。

編集に当たっては、この本を手にした人に、より親しんでもらえるように、視覚に訴える地図・写真を多く使うように考えた。

見開きで昭和三十年頃の色彩の地図がある。地図を見て、「ここは田んぼだったのだ」などと、当時の地域の姿を読み取る。頁をめくると文字で当時の主なことが述べられているのを読み、当時の地域の様子を識る。一部、そのような構成にならなかったが、このことによって、よりこの図書に親しんでもらえるのではないかと考える。

第三章の図書の紹介は、単なる参考図書の紹介では見過ごされてしまう恐れがあると考え、表紙を入れ解説する事にした。それにしても発刊された図書は多い。貴重な財産である。

■ふるさとを伝える（中島）

平成二年、柿生・岡上村百年会が結成され、村誕生百年を盛大に祝った。百年の歩み、それは郷土の先人の努力の歩みである。

ふるさと柿生・岡上が都市化する中「ふるさとの心」や先人の努力を次の代に伝えるのは、今を生きる私たちの役目である。

地域の方々の力の結集で『地図で辿る思い出のふるさと』の刊行が出来た。そして、多くの方々からお褒めのお言葉を頂いた。

しかし、この図書の出版で役目が終わったのではない。

「ふるさとの心」を次の世代の人々に伝える事を考えなければならないのである。

（文責・杉本長治）

杉本長治　　中島豪一　　中山　茂

（読売新聞の図書発刊報道記事より写真のみ転載）

会員の活躍

✂麻生区美術家協会　小品展

七月十日～七月二十九日、麻生区美術家協会（代表・安富信也）の会員二十名による小品展がギャラリー華沙里で開催された。

出品作品は洋画・日本画・工芸で、題材や表現方法などすべて異なり、一人ひとりの作家の個性が楽しめる展覧会となった。

麻生区美術家協会は、このところ会員を増やし、会員向けの協会だよりの発行を始めた。「芸術のまち」という地域性を意識しながら活動できる新たな拠点を探る努力もしている。

今年も、あさお区民まつり協賛「麻生区美術家協会展」（第二十四回）が麻生市民ギャラリーにて十月十日～十五日に開催される。美術の秋を彩る二十一名の会員の作品を展示する。

✂志村幸男氏

絵本『美しい日本の神話』

「くにうみ」「あまのいわと」「やまたのおろち」という神話がある。脚色されて判りやすい文になった絵本が出版されたのでさっそく購入して読んでみた。『古事記』の上巻・神代の巻から抜き出した話である。

絵は美術工芸部員で琴平神社宮司の志村幸男氏作。原画は油絵。

絵本は見るものだとつくづく思える。表紙絵を含めた五十三枚の絵。油絵の具の色とキャンバスの麻目を生かしている。色彩鮮やかで、それぞれのお話の場面を的確に捉えている。親子、家族一緒もいいし、小さな子どもでもひとりで楽しくお話の世界を味わえる。

さらにこの絵本は、ポケットの中にもうひとつの楽しみ方を用意していた。それぞれのページに対応させた、声優によるお話の朗読がCDに収められている。もちろん音声だけでも十分楽しめる。総合的に、幼児からお年寄り、障害者までが神話に親しめるつくりであるのが嬉しい。

『美しい日本の神話』の表紙

この絵本では、参考資料となった『古事記ものがたり』（サン・グリーン出版）の著者である小林晴明氏・宮崎みどり氏の巧みな文と脚本が志村氏の絵を際立たせていることを付け加えたい。

絵本は一冊二三一〇円でCD付。琴平神社で購入できる。売り上げの一部は昨年六月に焼失した本殿・拝殿の再建資金の一部に充てられるとのこと。（松田洋子）

▽新役員の紹介

平成二十年・二十一年度役員は次の通りです。

会　長　菅原　敬子
副会長　笠原　恒子
〃　伊藤　胡桃
〃　千坂　隆男
会　計　佐藤百合子
〃　山室　茂樹
総　務　橋本　周
〃　佐藤　勝昭
監　事　菊池　武久
〃　伊藤志津子

編集後記

▼文化協会は新会長を迎え、役員の顔ぶれも一新▼「古くから一生懸命やってこられた方のご意見を大切にしなければならないと思っています」菅原会長は本誌インタビューでこう語っている▼副会長を務められた後、顧問として会を支えてくださった水上馨氏が今年五月、逝去された▼水上氏は小誌のスタッフとしても活躍されたが、入会の遅かった筆者は会の活動の中で接点をもてなかったのが残念。ご冥福を祈ります。（松田記）

松田洋子・関森田鶴子・千坂隆男
橋本　周・佐藤勝昭・田口正太郎

麻生区文化協会会報
からむし　第四十五号
平成二十年九月三十日発行
発行人　麻生区文化協会
　　会長　菅原敬子
編　集　麻生区文化協会
　　広報部
川崎市麻生区万福寺一－五－二
　麻生文化センター内
☎　〇四四－九五一－一三〇〇
印　刷　㈱マイタウン21